ふれあいつながり かわら版

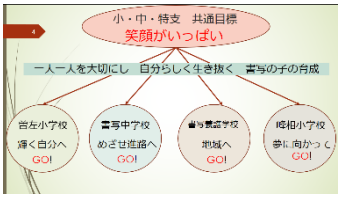
姫路市教育委員会
学校指導課
小中一貫教育推進係
(079)221-2120

第3回小中一貫教育担当者会

本年度最後の小中一貫教育担当者会を、令和２年２月５日に行いました。まず、担当校長の佐竹校長から、四郷学院の取組を例に、小中一貫、そしてその先の高校、社会へと子供のキャリアをつないでいく必要性についての話がありました。

子供たちに、将来必要となる力をどのように育むか、その視点で３つの実践発表を紹介します。

■書写中学校ブロック
～小中特別支援一貫・連携教育～



書写養護学校を含むブロックとして、障害の有無に関係なく、児童生徒一人一人の学びや育ちを共有するという視点から、「小中特別支援一貫・連携教育」と呼び、４校の交流を大事にした取組を進めています。書写養護学校と、それぞれの学校間での交流を重ねる中で、小中の子供には、相手の立場に立ち、理解しようする態度や、自分たちにできることを考え、工夫して、一緒に活動しようとする力が育っています。また、書写養護学校の子供にとっては、学校間交流で出会う同世代の友だちの声がとても刺激になっています。

４校の共通テーマ「笑顔がいっぱい」を大切に、様々な特性を持つ者が一緒に生活する社会で、互いを尊重しつつ、自分らしく生きるための基盤を、４校が連携して育んでいる様子が伝わってくる発表でした。

■白鷺小中学校
～義務教育学校　開校２年目の歩み～

白鷺小中学校は、開校してからの２年間の中で、義務教育学校としての強みに目を向けた取組を進めてきました。９年間を４・３・２年で区分してリーダー学年を３回経験させる中で、上級生としての自覚や自尊感情を高めることや、異学年交流を進める中で、下級生に上級生への憧れと、そこを目指す意欲を育てることができています。

本年度は、「探究し続ける児童生徒の育成」を研究主題として、全教職員で一人一回、年間50本の研究授業を行いました。そして、その先には、新しい学習指導要領に基づいた授業改善や、９年間のまとめとなる「ＡＣＥ学習」があります。「ＡＣＥ学習」は、個人の興味関心から発した課題に対する９年生の探究学習とその成果発表ですが、これは生徒自身が本当に探究したいことを持っているかどうかが成功の鍵になります。だからこそ、研究の苦労を共有しつつ、全教員が一体感を持って、個々の生徒に探究の種を見出させるような授業改善に取り組んでいるとの発表でした。

■四郷学院
～分離型義務教育学校としての取組～

本年度より義務教育学校となった四郷学院は、前期課程校舎と後期課程校舎が徒歩３～４分離れている環境の中で、児童生徒の交流の在り方を工夫し、また、研修を中心に、教師間の交流機会を積極的に増やしてきました。その上で、講師として20名の地域人を招き、以前から進めてきたキャリアノートを活用したキャリア教育の充実を図るなど、取組を深めています。

分離型の環境の中でも、前期後期の教師間で互いの実践を知り、生徒指導面を含めて子供の状況を共有することで、交流活動やキャリア教育もつながりのあるものになり、児童生徒の未来への期待や自己有用感につながっていることがよく分かる発表でした。

講評では、金澤校長（花田小）から、新学習指導要領において、就学前から高校までの円滑な接続が明記されていることも踏まえ、今後、益々「つながり」がキーワードとなるとの話がありました。子供の学びと育ちの縦のつながりと、学校間、教職員間の横のつながりを深めていくことが、小中一貫教育の成果へとつながるのだと、３ブロックの実践発表を聞きながら改めて感じました。

そして、松岡校長（城北小）の話の通り、小中一貫教育の具体的な実践はそれぞれのブロックの特徴に応じて考えるものですが、思いや熱意は、全校、全教職員に共通すべきものだと思いました。